

要介護度別には、非該当、要介護 1～4 までは、拘縮（膝関節）「なし」の割合は、認定回数が増えるにしたがって減少していた。要支援においては、2 回目 66.5%であったのが、3 回目 66.6%と増加し、4 回目で 64.9%と減少していた。要介護 5 では、初回 53.1%から、2 回目 57.0%、3 回目 57.6%と増加し、4 回目は 52.2%と減少していた。

表 73 要介護度別拘縮（膝関節）「なし」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	78	70.9	67.6	70.6	67.4	60.3	53.1	68.2
2回目	70	66.5	65.5	68.5	66.3	58.8	57.0	65.9
3回目	60.9	66.6	64.7	67.8	64.2	55.6	57.6	65.0
4回目	56.5	64.9	63.6	66.2	61.6	52.7	52.2	63.2

(10) 拘縮（足関節）

全体として拘縮（足関節）は、初回は「なし」が 14,965 名（92.6%）、「あり」が 1,191 名（7.4%）であった。2 回目は、「なし」が 14,919 名（92.3%）、「あり」が 1,237 名（7.7%）であった。3 回目は、「なし」が 14,908 名（92.3%）、「あり」が 1,248 名（7.7%）であった。4 回目は、「なし」が 14,786 名（91.5%）、「あり」が 1,370 名（8.5%）であった。このように、「拘縮（足関節）あり」の割合は初回から 2 回目にかけては増加するが、3 回目は変化なしで、4 回目 8.5%と増加していた。

要介護度別には、非該当は、すべての認定時において「拘縮（足関節）なし」であった。要支援では、認定回数が増えるにしたがって、「拘縮（足関節）なし」の割合は減少していた。要介護 1 から 3 までは、初回から 2 回目までは減少し、3 回目で増加、4 回目で再び減少というパターンを示していた。要介護 1 は、初回の 94.4%から 94.0%へ、3 回目 94.2%、4 回目 93.6%となっていた。要介護 2 も初回の 91.9%から 91.5%へ、3 回目 91.9%、4 回目 90.8%となっていた。要介護 3 も初回の 89.2%から 88.1%へ、3 回目 81.4%、4 回目 87.4%となっていた。要介護 4 と 5 は、初回から 2 回目に、それぞれ、81.5%から 83.4%へ、77.0%から 81.8%と増加していた。要介護 4 は、3 回目 82.0%、4 回目 80.6%と減少していたが、要介護 5 は、3 回目 81.8%と変化なしで、4 回目 80.9%と減少するというパターンを示していた。

表 74 要介護度別拘縮（足関節）「なし」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	97.6	94.4	91.9	89.2	81.5	77.0	92.6
2回目	100	96.9	94.0	91.5	88.1	83.4	81.8	92.3
3回目	100	96.1	94.2	91.9	88.4	82.0	81.8	92.3
4回目	100	95.8	93.6	90.8	87.4	80.6	80.9	91.5

(11) 拘縮（その他）

全体として拘縮（その他）について、初回は「なし」が13,598名（84.2%）、「あり」が2,558名（15.8%）であった。2回目は、「なし」が13,672名（84.6%）、「あり」が2,484名（15.4%）であった。3回目は、「なし」が13,686名（84.7%）、「あり」が2,470名（15.3%）であった。4回目は、「なし」が13,650名（84.5%）、「あり」が2,506名（15.5%）であった。

このように、結果、「拘縮（その他）あり」については、初回から3回目まで、減少し、4回目にかけて「あり」が増加していた。

要介護度別には、多様な変化のパターンを示していた。認定回数が増えるにしたがって、「拘縮（その他）なし」が減少していたのは、非該当と要介護4であった。要介護5は、非該当等とは、逆に認定回数が増えるにしたがって、「拘縮（その他）なし」が増加していた。要支援と要介護2は、3回目まで、「拘縮（その他）なし」が増加し、4回目で減少していた。要介護1では、2回目に「拘縮（その他）なし」が増加し、3回、4回目と減少しており、この項目については、要介護度によって、多様なパターンが示された。

表 75 要介護度別拘縮（その他）「なし」の割合（%）の経年的変化（N=16,156）

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	91	86.4	84.7	83.0	82.7	82.5	79.4	84.2
2回目	83	87.0	85.9	83.7	82.2	80.0	79.7	84.6
3回目	78.3	88.0	85.8	84.0	82.9	76.2	80.0	84.7
4回目	69.6	87.8	85.6	83.3	82.6	77.3	80.6	84.5

(12) 寝返り

全体として寝返りは、初回は「つかまらないでできる」が9,938名（61.5%）、「何かにつかまえばできる」が5,468名（33.8%）、「できない」750名（4.6%）であった。2回目は、「つかまらないでできる」が9,536名（59.0%）、「何かにつかまえばできる」が5,998名（37.1%）、「できない」が622名（3.8%）であった。3回目は、「つかまらないでできる」が8,940名（55.3%）、「何かにつかまえばできる」が6,525名（40.4%）、「できない」が691名（4.3%）であった。4回目は、「つかまらないでできる」が7,962名（49.3%）、「何かにつかまえばできる」が7,111名（44.0%）、「できない」が1,083名（6.7%）であった。

これらの結果、寝返りについては、「何かにつかまえばできる」、「できない」という寝返りに何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、認定回数が増加するにしたがって、増加していた。しかし、「できない」高齢者は、初回から2回目で減少し、3回目、4回目と増加するというパターンを示していた。

要介護度別には、非該当から要介護2までは、寝返りが自立の高齢者の割合は、初回か

ら4回目まで、認定回数が増加するにしたがって減少していたが、要介護3から5までは、初回よりも2回目の自立割合が高くなる傾向がみられた。この傾向は、要介護5に顕著で、初回の自立者割合は、わずか9.6%であったのに対し、2回目は22.1%と増加していた。

表 76 要介護度別寝返り「つかまらないでできる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	84.9	70.1	55.7	39.7	20.2	9.6	61.5
2回目	65	77.9	66.0	54.5	40.1	26.2	22.1	59.0
3回目	60.9	74.5	61.5	50.2	37.8	24.7	21.8	55.3
4回目	60.9	68.0	55.4	43.1	31.7	22.2	20.0	49.3

(13) 起き上がり

全体として起き上がりについては、初回は「つかまらないでできる」が5,941名(36.8%)、「何かにつかまえばできる」が8,988名(55.6%)、「できない」が1,227名(7.6%)であった。2回目は、「つかまらないでできる」が5,290名(32.7%)、「何かにつかまえばできる」が9,870名(61.1%)、「できない」が996名(6.2%)であった。3回目は、「つかまらないでできる」が4,531名(28.0%)、「何かにつかまえばできる」が10,328名(63.9%)、「できない」が1,973名(8.0%)であった。4回目は、「つかまらないでできる」が3,833名(23.7%)、「何かにつかまえばできる」が10,350名(64.1%)、「できない」が1,973名(12.2%)であった。

このように、起き上がりについては、「何かにつかまえばできる」「できない」という何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回から4回目にかけて増加していた。

要介護度別には、要支援、要介護1から3までは、認定回数が増えるにしたがって、自立割合が減少していた。

しかし、非該当は、初回の78%から2回目に自立割合が30%と急激に減少するが、3回目に34.8%と増加し、4回目に21.7%となるというパターンを示していた。

要介護4と5は、2回目に自立割合が、それぞれ8.2%から11.5%、3.0%から6.6%とかなり増加していた。要介護4は、3回目には10.0%と減少するが、要介護5は、3回目も8.1%と増加を続けていた。ただし、4回目には要介護4、5ともに、3回目よりも自立割合は8.6%、6.0%減少する。しかし、これらの値は初回よりも高い割合であることから、要介護4、5においては、初回が最も自立割合が低かった。

表 77 要介護度別起き上がり「つかまらないでできる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	78	57.8	42.2	30.3	19.4	8.2	3.0	36.8
2回目	30	47.9	37.1	28.3	19.4	11.5	6.6	32.7
3回目	34.8	41.2	31.5	23.9	17.1	10.0	8.1	28.0
4回目	21.7	35.2	26.6	20.4	14.0	8.6	6.0	23.7

(14) 両足での立位

全体として両足での立位は、初回は「支えなしでできる」が9,399名(58.2%)、「何かにつかまえばできる」が5,524名(34.2%)、「できない」が1,233名(7.6%)であった。2回目は、「支えなしでできる」が9,514名(58.9%)、「何か支えがあればできる」が5,663名(35.1%)、「できない」が979名(6.1%)であった。3回目は、「支えなしでできる」が8,889名(55.0%)、「何かに支えがあればできる」が6,005名(37.2%)、「できない」が1,262名(7.8%)であった。4回目は、「支えなしでできる」が8,108名(50.2%)、「何かに支えがあればできる」が6,128名(37.9%)、「できない」が1,920名(11.9%)であった。

このように、両足での立位について何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回から2回目にかけては、減少していたが、3回目、4回目は、増加していた。

要介護度別には、要支援と要介護1は、認定回数が増加するにしたがって、自立割合が減少していた。逆に、要介護5は認定回数が増加するにしたがって、自立割合が増加していた。要介護4についても3回目までは増加していた。要介護2と3は、初回よりも2回目のほうが自立が増えるが、3回から4回目では減少していた。非該当は、3回目まで減少するが、4回目は、自立割合は増加していた。

表 78 要介護度別両足での立位「支えなしでできる」の割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	87	82.7	73.2	47.9	28.8	9.7	2.4	58.2
2回目	70	82.2	68.1	51.0	36.9	20.0	16.7	58.9
3回目	52.2	78.0	62.8	47.2	34.6	20.2	17.0	55.0
4回目	65.2	73.5	57.5	40.8	30.1	19.2	17.6	50.2

(15) 歩行

全体として歩行は、初回は「つかまらないでできる」が5,556名(34.4%)、「何かにつかまえばできる」が8,477名(52.5%)、「できない」が2,123名(13.1%)であった。

2回目は、「つかまらないでできる」が5,418名(33.5%)、「何かにつかまえばできる」が8,816名(54.6%)、「できない」が1,922名(11.9%)であった。3回目は、「つかまらないでできる」が4,967名(30.7%)、「何かにつかまえばできる」が8,722名(54.0%)、「できない」が2,467名(15.3%)であった。4回目は、「つかまらないでできる」が4,317名(26.7%)、「何かにつかまえばできる」が8,557名(53.0%)、「できない」が3,282名(20.3%)であった。

これらの結果、歩行は、約7割において、「何かにつかまればできる」「できない」という介助が必要な高齢者であることが示された。このように歩行に何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は初回から4回目にかけて、漸次、増加していた。

要介護度別に歩行の自立群の推移をみると、要支援だけは、認定回数が増加するにしたがって、自立群が減少していたが、要介護 1 から 5 までのすべては初回よりも 2 回目のほうが自立群の割合が増加していた。この増加の割合は、要介護 4、5 に顕著で、要介護 4 は、初回の 5.8%から 10.4%と増加し、ほぼ 2 倍に、要介護 5 は、1.5%から 8.1%と示され 5 倍以上となっていた。要介護 4 だけは、3 回目も自立割合が増加し、10.8%を示した。要介護 5 は、3 回目に 6.9%と自立群は減少するが、4 回目には再び、自立群は 8.4%と増加していた。要介護 5 以外は、すべて 3 回目から 4 回目にかけて自立群は減少していた。

表 79 要介護度別歩行「つかまらないでできる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	74	66.3	35.2	25.4	16.8	5.8	1.5	34.4
2回目	30	55.3	35.9	27.1	19.8	10.4	8.1	33.5
3回目	30.4	49.7	33.0	24.9	18.9	10.8	6.9	30.7
4回目	26.1	42.7	29.3	21.0	15.6	10.3	8.4	26.7

(16) 移乗

全体として移乗は、初回は「自立」が 11,083 名 (68.6%)、「見守り等」が 2,661 名 (16.5%)、「一部介助」が 1,541 名 (9.5%)、「全介助」が 871 名 (5.4%) であった。2 回目は、「自立」が 11,375 名 (70.4%)、「見守り等」が 2,708 名 (16.8%)、「一部介助」が 1,394 名 (8.6%)、「全介助」が 679 名 (4.2%) であった。3 回目は、「自立」が 10,955 名 (67.8%)、「見守り等」が 2,620 名 (16.8%)、「一部介助」が 1,629 名 (10.1%)、「全介助」が 952 名 (5.9%) であった。4 回目は、「自立」10,130 名 (62.7%)、「見守り等」が 2,626 名 (16.3%)、「一部介助」が 1,894 名 (11.7%)、「全介助」が 1,506 名 (9.3%) であった。

これらの結果、移乗は「見守り等」「一部介助」「できない」のように、何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回から 2 回目にかけて減少していた。しかし、3 回目、4 回目には、再び増加に転じていた。

要介護度別には、非該当から要介護 1 までは、自立割合は認定回数が増えるにしたがって減少していた。しかし、要介護 2 から 5 までは、すべて初回よりも 2 回目自立割合が高かった。とくに要介護 4 は、初回の 4.4%から 24.6%へと増加し、5.6 倍を示した。要介護 5 は、さらに増加しており、初回の 0.6%から、18.8%へ増加しており、31.3 倍を示していた。要介護 4 と 5 は、3 回目も自立割合が増加し、要介護 4 は 28.2%に、要介護 5 は 24.8%を示していた。要介護 2 と 3 は、3 回目、4 回目と自立割合は減少していた。

表 80 要介護度別歩行「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	96	98.7	90.5	56.0	25.2	4.4	0.6	68.6
2回目	78	94.1	83.4	61.6	43.8	24.6	18.8	70.4
3回目	73.9	90.3	79.1	58.7	43.7	28.2	24.8	67.8
4回目	60.9	86.5	73.1	51.8	39.5	27.5	23.0	62.7

(17) 立ち上がり

全体として立ち上がりは、初回は「つかまらないでできる」が 2,779 名 (17.2%)、「何かにつかまればできる」が 11,967 名 (74.1%)、「できない」が 1,410 名 (8.7%) であった。2 回目は、「つかまらないでできる」が 2,371 名 (14.7%)、「何かにつかまればできる」が 12,685 名 (78.5%)、「できない」が 1,100 名 (6.8%) であった。3 回目は、「つかまらないでできる」が 2,055 名 (12.7%)、「何かにつかまればできる」が 12,584 名 (77.9%)、「できない」が 1,517 名 (9.4%) であった。4 回目は、「つかまらないでできる」が 1,669 名 (10.3%)、「何かにつかまればできる」が 12,279 名 (76.0%)、「できない」が 2,208 名 (13.7%) であった。

このように、立ち上がりは、約 8 割が「何かにつかまればできる」「できない」と示され、自立度が低い項目であった。立ち上がりは何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回から 4 回目にかけて、漸次、増加する傾向が見られた。

要介護度別の立ち上がりの自立割合は、非該当から要介護 2 までは、認定回数が増えるにしたがって、漸次、減少していた。要介護 3 から 5 までは、初回から 2 回目にかけて自立割合が増加していた。とくに要介護 5 は、増加の割合は顕著で初回の 0.5% から、2 回目は 3.0% と 5 倍となっていた。要介護 5 は、3 回目も 3.6% と増加しており、認定回数が増えて自立割合が 3 回目までは増加していた。要介護 3、4 は、3 回目には減少し、4 回目は、すべての要介護度において自立割合が 3 回目から減少していた。

表 81 要介護度別立ち上がり「つかまらないでできる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	57	30.7	18.9	12.9	8.1	3.2	0.6	17.2
2回目	22	22.8	15.6	12.5	9.8	5.1	3.0	14.7
3回目	21.7	18.9	13.8	11.1	8.7	4.1	3.6	12.7
4回目	8.7	14.8	11.7	8.9	6.7	3.7	3.3	10.3

(18) 片足での立位

全体として片足での立位は、初回は、「支えなしでできる」が 2,350 名 (14.5%)、「何かを支えがあればできる」が 9,366 名 (58.0%)、「できない」4,440 名 (27.5%) であった。2 回目は、「支えなしでできる」が 2,002 名 (12.4%)、「何かを支えがあればできる」が 10,083

名 (62.4%)、「できない」が 4,071 名 (25.2%) であった。3 回目は、「支えなしでできる」が 1,714 名 (10.6%)、「何かに支えがあればできる」が 9,991 名 (61.8%)、「できない」が 4,451 名 (27.6%) であった。4 回目は、「支えなしでできる」が 1,416 名 (8.8%)、「何かに支えがあればできる」が 9,562 名 (59.2%)、「できない」が 5,178 名 (32.1%) であった。

これらの結果、片足での立位については、約 8 割～9 割が「何かにつかまればできる」「できない」で、自立割合が低い項目であった。また、片足での立位に、何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回から 4 回目まで、漸次、増加する傾向が見られた。

要介護度別には、非該当から要介護 1 までは、自立割合は認定回数が増えるにしたがって減少していたが、要介護 2 から 5 までの初回から 2 回目の自立割合は、すべて増加していた。とくに要介護 5 は、初回の 0.3% が 2 回目に 1.8% と示され 6 倍となっていた。

要介護 2、3 は、3 回目、4 回目と自立割合は減少していた。要介護 4 は、3 回目も自立割合は増加し、4 回目で減少していた。要介護 5 は 3 回目で減少するが、4 回目で再び増加し、自立割合は初回が最も低く 4 回目が高かった。

表 82 要介護度別片足での立位「支えなしでできる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	65	29.5	15.5	9.2	6.1	1.4	0.3	14.5
2回目	22	22.3	13.2	9.4	6.5	2.3	1.8	12.4
3回目	17.4	18.4	11.5	8.7	4.9	2.4	1.2	10.6
4回目	13.0	15.5	9.6	6.7	3.9	2.2	2.1	8.8

(19) 洗身

全体として洗身は、初回は「自立」が 6,748 名 (41.8%)、「一部介助」が 5,716 名 (35.4%)、「全介助」が 2,440 名 (15.1%)、「行っていない」が 1,252 名 (7.7%) であった。2 回目は、「自立」が 5,925 名 (36.7%)、「一部介助」が 6,923 名 (42.9%)、「全介助」が 2,847 名 (17.6%)、「行っていない」が 461 名 (2.9%) であった。3 回目は、「自立」が 5,133 名 (31.8%)、「一部介助」が 7,024 名 (43.5%)、「全介助」が 3,473 名 (21.5%)、「行っていない」が 526 名 (3.3%) であった。4 回目は、「自立」が 4,372 名 (27.1%)、「一部介助」が 6,886 名 (42.6%)、「全介助」が 4,318 名 (26.7%)、「行っていない」が 580 名 (3.6%) であった。

これらの結果、全体的には、洗身は「一部介助」、「全介助」で、何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合が初回から 4 回目にかけて増加する傾向が見られた。

要介護度別には、要支援、要介護 1 は認定回数が増加するにしたがって、自立度が減少していた。要介護 2 から 5 まではすべて初回に比較すると、2 回目の自立割合が増加していた。要介護 2 から 3 までは、要介護 3 から 5 まで、すべて自立割合が増加していた。とりわけ要介護 5 は、初回が自立割合は 0 であったが、2 回目が 1.5%、3 回目が 1.8%、4 回目が 3.6% と認定回数が増加するにしたがって、自立割合も増加していた。

表 83 要介護度別洗身「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	96	88.6	53.8	16.9	4.8	0.9	0.0	41.8
2回目	52	75.1	45.6	17.7	7.2	2.4	1.5	36.7
3回目	52.2	65.7	38.3	15.9	7.3	2.5	1.8	31.8
4回目	47.8	57.1	32.0	13.4	5.9	2.1	3.6	27.1

(20) じょくそう

全体としてじょくそうは、初回は「ない」が 15,726 名 (97.3%)、「あり」が 430 名 (2.7%) であった。2 回目は、「ない」が 15,828 名 (98.0%)、「あり」が 328 名 (2.0%) であった。3 回目は、「ない」が 15,760 名 (97.5%)、「あり」が 369 名 (2.5%) であった。4 回目は、「ない」が 15,613 名 (96.6%)、「あり」が 543 名 (3.4%) であった。

これらの結果、「あり」の割合は初回に 2.7%、2 回目に 2.0%と減少するが、3 回目に 2.5%と増加し、4 回目では 3.4%とさらに増加していた。

要介護度別には、非該当ではじょくそうはなく、要支援、要介護 1 では、認定回数が増えるにしたがって、「あり」の割合が増加していた。要介護 2 から 5 まででは、初回の「あり」の割合は、2 回目ですべて減少していた。要介護 2 は、2.5%から 2.2%へ、要介護 3 は、4.3%から 4.0%へ、要介護 4 は、9.2%から、5.2%へ、要介護 5 は、26.3%から 11.9%へと減少しており、要介護 4、5 の減少率は大きかった。2 回目から 3 回目の変化をみると、要介護 3 と要介護 5 では、それぞれ 3.6%、9.9%と、さらに減少していたが要介護 2 と 4 は、3.1%、5.7%と増加していた。4 回目は、要介護 5 が、さらに 8.4%と減少した以外は、すべて増加していた。

表 84 要介護度別じょくそう「あり」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	0.4	0.9	2.5	4.3	9.2	26.3	2.7
2回目	0	0.5	1.0	2.2	4.0	5.2	11.9	2.0
3回目	0	0.9	1.5	3.1	3.6	5.7	9.9	2.5
4回目	0	1.5	2.6	4.0	5.1	6.4	8.4	3.4

(21) 皮膚疾患

全体として皮膚疾患は、初回は「ない」が 13,295 名 (82.3%)、「あり」が 2,861 名 (17.7%) であった。2 回目は、「ない」が 13,091 名 (81.0%)、「あり」が 3,065 名 (19.0%) であった。3 回目は、「ない」が 12,799 名 (79.2%)、「あり」が 3,357 名 (20.8%) であった。4 回目は、「ない」が 12,509 名 (77.4%)、「あり」が 3,647 名 (22.6%) であった。

このように皮膚疾患がある割合は、認定回数が増加するにしたがって、初回 17.7%、2 回目 19.0%、3 回目 20.8%、4 回目 22.6%と漸次、増加していた。

要介護度別には、要介護 2 と 5 を除くと、認定回数が増加するにしたがって、皮膚疾患の割合は増加していた。要介護 2 は、2 回目に初回の 19.3% が 19.1% と減少していた。要介護 5 は、3 回目 29.6% から、4 回目 29.0% と減少していた。皮膚疾患がある割合は、要介護 4 と 5 を比較すると、要介護 5 のほうが初回から 2 回にかけての増加が大きく、要介護 4 が 0.9% 増加したのに対し、要介護 5 は、3.9% も増加していた。

表 85 要介護度別皮膚疾患「あり」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	0	14.7	16.4	19.3	19.6	23.3	23.9	17.7
2回目	4	15.8	18.0	19.1	22.6	24.2	27.8	19.0
3回目	8.7	17.6	19.7	21.0	24.5	26.1	29.6	20.8
4回目	17.4	19.5	21.6	23.4	24.7	28.7	29.0	22.6

(22) えん下

全体としてえん下は、初回は、「できる」が 14,144 名 (87.5%)、「見守り等」が 1,978 名 (12.2%)、「できない」が 34 名 (0.2%) であった。2 回目は、「できる」が 14,132 名 (87.5%)、「見守り等」が 1,987 名 (12.3%)、「できない」が 37 名 (0.2%) であった。3 回目は、「できる」が 13,912 名 (86.1%)、「見守り等」が 2,199 名 (13.6%)、「できない」が 45 名 (6.3%) であった。4 回目は、「できる」が 13,367 名 (82.7%)、「見守り等」が 2,656 名 (16.4%)、「できない」が 133 名 (0.8%) であった。

これらの結果、えん下ができる割合は、初回から 2 回目では変化がないが、2 回目から 3 回目、3 回目から 4 回目にかけて、「見守り等」「できない」の要介護高齢者の割合が増加する傾向が見られた。

要介護度別には、要支援から要介護 4 までは、えんげができる割合は認定回数が増加するにしたがって減少していた。しかし要介護 5 は、初回が 53.7% の自立であったのに対し、2 回目は 71.9% と自立割合が大きく増加していた。ただし、3 回目、4 回目は、71.0%、68.7% と減少していた。

表 86 要介護度別えん下「できる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	96.2	92.5	84.7	80.3	67.9	53.7	87.5
2回目	91	95.1	90.7	84.8	80.8	73.1	71.9	87.5
3回目	100	93.8	89.8	82.5	79.4	72.4	71.0	86.1
4回目	100	92.8	86.3	78.3	74.8	67.2	68.7	82.7

(23) 食事摂取

全体として食事摂取は、初回は、「自立」が 13,328 名 (82.5%)、「見守り等」が 1,743 名 (10.8%)、「一部介助」が 878 名 (5.4%)、「全介助」が 207 名 (1.3%) であった。

2回目は、「自立」が 13,218 名 (81.8%)、「見守り等」が 1,935 名 (12.0%)、「一部介助」が 869 名 (5.4%)、「全介助」が 134 名 (0.3%) であった。3回目は、「自立」が 12,698 名 (78.6%)、「見守り等」が 2,152 名 (13.3%)、「一部介助」が 1,096 名 (6.8%)、「全介助」が 210 名 (1.3%) であった。4回目は、「自立」が 11,919 名 (73.8%)、「見守り等」が 2,334 名 (14.4%)、「一部介助」が 1,421 名 (8.8%)、「全介助」が 482 名 (3.0%) であった。

これらの結果から、全体としては、食事摂取においては、「見守り等」「一部介助」「全介助」といった介助が必要な要介護高齢者の割合が増加する傾向が見られた。

要介護別には、非該当から要介護 2 までは、認定回数が増加するにしたがって、自立が減少していた。要介護 3 から 5 では、初回から 2 回目に、それぞれ、63.3%から 66.3%、40.0%から 52.5%へ、10.4%から 47.8%へと自立が増加していた。要介護 5 においては、2回目は初回の自立割合の 4.6 倍を示していた。要介護 5 は、3回目も 53.1%とさらに増加していた。要介護 3、4 においては、自立割合は 3回目、4回目と減少していた。要介護 5 の自立割合は、3回目、4回目共に要介護 4 よりも、それぞれ 1.1%、2.9%、高くなっていた。

表 87 図 要介護度別食事摂取「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	99.1	93.5	79.8	63.3	40.0	10.4	82.5
2回目	100	96.9	89.8	75.8	66.3	52.5	47.8	81.8
3回目	100	94.8	86.7	70.9	61.1	52.0	53.1	78.6
4回目	78.3	91.6	81.9	64.7	57.0	46.1	49.0	73.8

(24) 口腔清潔

全体として口腔清潔は、初回は「自立」が 11,418 名 (70.7%)、「一部介助」が 3,655 名 (22.6%)、「全介助」が 1,083 名 (6.7%) であった。2回目は、「自立」が 11,508 名 (71.2%)、「一部介助」が 3,681 名 (22.8%)、「全介助」が 967 名 (6.0%) であった。3回目は、「自立」が 10,683 名 (66.1%)、「一部介助」が 4,191 名 (25.9%)、「全介助」が 1,282 名 (7.9%) であった。4回目は、「自立」が 9,621 名 (59.6%)、「一部介助」が 4,660 名 (28.8%)、「全介助」が 1,875 名 (11.6%) であった。

これらの結果から、口腔清潔は「一部介助」「全介助」といった何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回から 2 回目にかけて減少するが、3回目、4回目にかけて増加し、3回目から 4 回目に介助を必要とする割合が高くなっていた。

表 88 要介護度別口腔清潔「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	99.4	92.2	62.1	23.9	5.9	0.3	70.7
2回目	78	96.2	85.9	62.1	40.1	21.7	19.4	71.2
3回目	78.3	92.1	78.5	55.0	38.1	24.5	23.0	66.1
4回目	65.2	85.7	70.0	48.0	33.3	22.5	26.6	59.6

(25) 洗顔

全体的に洗顔は、初回は「自立」が 11,577 名 (71.7%)、「一部介助」が 3,846 名 (23.8%)、全介助が 733 名 (4.5%) であった。2 回目は、「自立」が 11,777 名 (72.9%)、「一部介助」が 3,700 名 (22.9%)、「全介助」が 697 名 (4.2%) であった。3 回目は、「自立」が 10,950 名 (67.8%)、「一部介助」が 4,207 名 (26.0%)、「全介助」が 999 名 (6.2%) であった。4 回目は、「自立」が 9,930 名 (61.5%)、「一部介助」が 4,608 名 (28.5%)、「全介助」が 1,618 名 (10.0%) であった。

これらの結果、洗顔の介助が必要な「一部介助」「全介助」の割合は、初回から 2 回目にかけて減少するが 2 回目から 3 回目、そして 4 回目と増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護 1 までの自立割合が、認定回数が増加するにしたがって減少していた。逆に、要介護 5 においては、認定回数が増加するにしたがって自立割合も増加していた。とくに 2 回目は、初回の 0.9% から 20.0% と増加し、22.2 倍を示していた。3 回目も 24.8%、4 回目も 27.5% と自立割合は、要介護 4 よりも高くなっていた。

要介護 2 から 5 までは、初回よりも 2 回目のほうが自立割合は高くなっていた。3 回目まで、自立割合が増加するのは、要介護 4 で、初回 5.4% から、2 回目は 24.6% と 4.6 倍となり、3 回目も 26.3% と増加していた。要介護 3 か、初回の 25.5% から、2 回目 43.3% と大きく増加していたが、3 回目は 40.3%、4 回目は 35.3% と減少していた。要介護 2 では、初回 63.9%、2 回目 64.4% と増加するが、2 回目以降は徐々に減少していた。

表 89 要介護度別洗顔「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	96	99.5	93.4	63.9	25.5	5.4	0.9	71.7
2回目	78	96.5	87.3	64.4	43.3	24.6	20.0	72.9
3回目	73.9	92.5	80.4	56.8	40.5	26.3	24.8	67.8
4回目	65.2	86.9	72.3	50.4	35.3	23.2	27.5	61.5

(26) 整髪

全体として整髪は、初回は「自立」が 12382 名 (76.6%)、「一部介助」が 2,676 名 (16.6%)、「全介助」が 1,098 名 (6.8%) であった。2 回目は、「自立」が 12,332 名 (76.3%)、「一部介助」が 2,694 名 (16.7%)、「全介助」が 1,130 名 (7.0%) であった。3 回目は、「自立」

が11,600名(71.8%)、「一部介助」が2,971名(18.4%)、「全介助」が1,585名(9.8%)であった。4回目は、「自立」が10,611名(65.7%)、「一部介助」が3,260名(20.2%)、「全介助」が2,285名(14.1%)であった。

これらの結果、整髪の何らかの介助が必要な割合は、初回23.4%で、2回目23.7%、3回目28.2%、4回目34.3%と漸次、増加していた。とりわけ、3回目から4回目に大きく増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護2までの自立割合は、認定回数が増加するにしたがって減少していた。要介護3から5までは、2回目が初回よりも自立割合は増加していた。要介護3は、3回目、4回目は自立割合が減少し、要介護4は、3回目まで自立割合が増加していた。要介護5は、初回から4回目まで認定回数が増加するにしたがって自立割合が増加していた。要介護4と5の初回から2回目への増加の割合は高く、要介護4は、初回の11.3%が2回目31.9%と2.8倍へ、要介護5は、初回の2.4%が12.8倍となっていた。

表 90 要介護度別整髪「自立」の割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	99.6	94.9	73.9	38.9	11.3	2.4	76.6
2回目	91	96.8	88.8	69.6	50.9	31.9	30.7	76.3
3回目	73.9	93.8	82.9	62.6	47.2	34.6	34.3	71.8
4回目	69.6	89.0	75.4	55.4	42.4	31.1	34.6	65.7

(27) つめ切り

全体としてつめ切りは、初回は「自立」が6,486名(40.1%)、「一部介助」が3,155名(19.5%)、「全介助」が6,515名(40.3%)であった。2回目は、「自立」が5,544名(34.3%)、「一部介助」が3,027名(18.7%)、「全介助」が7,585名(46.9%)であった。3回目は、「自立」が4,628名(28.6%)、「一部介助」が2,889名(17.9%)、「全介助」が8,639名(53.5%)であった。4回目は、「自立」が3,859名(23.9%)、「一部介助」が2,664名(16.5%)、「全介助」が9,633名(59.6%)であった。

これらの結果から、つめ切りの何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回から4回目と認定回数が増加するにしたがって、59.9%、65.7%、71.4%、76.1%と漸次、増加していた。

要介護度別には、自立割合の変化をみると、非該当から要介護2までは、自立割合は、認定回数が増加するにしたがって減少していた。要介護3から5までは、2回目のほうが初回よりも自立割合は増加していた。要介護3、3回目、4回目は、自立割合が減少し、要介護4は、3回目までは自立割合は増加していた。要介護5は、初回から4回目まで、認定回数が増加するにしたがって自立割合は増加していた。要介護5の初回から2回への増加割合をみると、0%から3.0%と示されていた。要介護5は、3回目3.3%、4回目5.1%

と増加していた。この4回目は、要介護4は3.4%で、要介護5のほうが自立割合が高かった。

表 91 要介護度別つめ切り「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	91	79.7	51.0	20.9	6.5	1.6	0.0	40.1
2回目	65	66.7	41.8	19.3	9.3	2.6	3.0	34.3
3回目	43.5	58.3	33.5	15.1	8.7	3.6	3.3	28.6
4回目	34.8	50.3	27.7	11.2	7.1	3.4	5.1	23.9

(28) 上衣の着脱

全体として上衣の着脱は、初回は「自立」が 9,689 名 (60.0%)、「見守り等」が 1,952 名 (12.1%)、「一部介助」が 3,182 名 (19.7%)、「全介助」が 1,333 名 (8.3%) であった。2回目は、「自立」が 9,473 名 (58.6%)、「見守り等」が 2,151 名 (13.3%)、「一部介助」が 3,381 名 (20.9%)、「全介助」が 1,151 名 (7.1%) であった。3回目は、「自立」が 8,722 名 (54.0%)、「見守り等」が 2,068 名 (12.8%)、「一部介助」が 3,820 名 (23.6%)、「全介助」が 1,546 名 (9.6%) であった。4回目は、「自立」が 7,922 名 (49.0%)、「見守り等」が 2,041 名 (12.6%)、「一部介助」が 3,951 名 (24.5%)、「全介助」が 2,242 名 (13.9%) であった。

これらの結果から、上衣の着脱に何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回 40.0%、2回目 41.4%、3回目 46.0%、4回目 51.0%と漸次、増加していた。ただし、全介助の割合は、初回の 8.3%から、2回目 7.1%と減少していた。

要介護度別には、非該当は初回から3回目までは減少するが、4回目に増加していた。要支援から要介護1は、認定回数が増加するにしたがって、自立割合が減少していた。要介護2から5までは、初回から2回目は、すべて自立割合が増加していた。要介護3は、初回 13.3%から2回目 26.8%と2倍になっていた。要介護4は、初回 2.1%から2回目 13.6%と6.5倍と増加していた。要介護5は、初回 0.3%から、2回目は 11.9%となっており、39.7倍となっていた。要介護2と3は3回目、4回目と自立割合が減少していた。要介護4と5は、3回目も増加し、それぞれ 15.5%、13.1%と示されていた。要介護4は、4回目は減少し 14.7%となっていたが、要介護5はさらに自立割合が増加し 15.8%となっていた。これにより、要介護5の自立割合は、要介護4よりも高くなっていた。また、自立割合は初回の 52.7倍を示していた。

表 92 要介護度別上衣の着脱「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	96	98.2	81.4	40.1	13.3	2.1	0.3	60.0
2回目	78	91.5	72.2	42.9	26.8	13.6	11.9	58.6
3回目	56.5	85.9	65.7	38.0	25.0	15.5	13.1	54.0
4回目	65.2	79.3	58.8	33.5	23.8	14.7	15.8	49.0

(29) ズボン等の着脱

全体としてズボン等の着脱は、初回は「自立」が 9276 名 (57.4%)、「見守り等」が 1,872 名 (11.6%)、「一部介助」が 3,214 名 (19.9%)、「全介助」が 1,794 名 (11.1%) であった。2 回目は、「自立」が 9,160 名 (56.7%)、「見守り等」が 2,064 名 (12.8%)、「一部介助」が 3,315 名 (20.5%)、「全介助」が 1,617 名 (10.0%) であった。3 回目は、「自立」が 8,348 名 (51.7%)、「見守り等」が 2,016 名 (12.5%)、「一部介助」が 3,616 名 (22.4%)、「全介助」が 2,176 名 (13.5%) であった。4 回目は、「自立」が 7,579 名 (46.9%)、「見守り等」が 1,925 名 (11.9%)、「一部介助」が 3,744 名 (23.2%)、「全介助」が 2,908 名 (18.0%) であった。

これらの結果、ズボン等の着脱に何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回 42.6%、2 回目 43.3%、3 回目 48.3%、4 回目 53.1%と増加する傾向が見られた。しかし、全介助の割合は、初回の 11.1%から 2 回目 10.0%と減少していた。

要介護度別には、非該当は初回 96.0%と 3 回目 60.9%と減少していたが、4 回目に 65.2%と増加していた。要支援と要介護 1 は、認定回数が増加するにしたがって、自立割合は減少していた。要介護 2 から 5 までは、初回から 2 回目までに、自立割合は、すべて増加していた。要介護 2 は、34.1%から 38.9%へ、要介護 3 は、7.3%から 23.1%へ、要介護 4 は、0.9%から 11.4%と 12.7 倍となっていた。要介護 5 は、0 から 9.0%と増加していた。2 回目から 3 回目においては、要介護 2 と 3 減少していたが、要介護 4 と 5 は、増加を続けていた。4 回目は、要介護 2 から 4 まで、すべて減少していたが、要介護 5 だけは、さらに自立割合が増加していた。これにより、要介護 5 の自立割合は 12.8%、要介護 4 の自立割合は 12.5%と、要介護 5 のほうが自立割合が高くなっていた。

表 93 要介護度別ズボン等の着脱「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	96	98.2	80.4	34.1	7.3	0.9	0.0	57.4
2回目	78	91.8	71.0	38.9	23.1	11.4	9.0	56.7
3回目	60.9	85.2	63.6	34.9	20.6	13.3	11.6	51.7
4回目	65.2	78.5	57.0	30.6	20.4	12.5	12.8	46.9

(30) 薬の内服

全体として薬の内服は、初回は「自立」が 6,655 名 (41.2%)、「一部介助」が 7,989 名 (49.4%)、「全介助」が 1,512 名 (9.4%)であった。2 回目は、「自立」が 6,361 名 (39.4%)、「一部介助」が 8,217 名 (50.9%)、「全介助」が 1,578 名 (9.8%)であった。3 回目は、「自立」が 5,789 名 (35.8%)、「一部介助」が 8,422 名 (52.1%)、「全介助」が 1,945 名 (12.0%)であった。4 回目は、「自立」が 5,216 名 (32.2%)、「一部介助」が 8,320 名 (51.5%)、「全介助」が 2,620 名 (16.2%)であった。

これらの結果から、薬の内服に何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回 58.8%、2 回目 60.6%、3 回目 64.2%、4 回目 67.7%と認定回数が増加するにしたがって、介助を必要とする人の割合が増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護 1 までは、初回から 4 回目までのすべての回において自立割合が減少していた。要介護 2 から 5 までは、初回から 2 回目まではすべて増加していた。要介護 2 は、22.4%から 23.4%へ、要介護 3 は、8.5%から 13.6%へ、要介護 4 は、2.2%から 5.8%へ、さらに要介護 5 は、0.6%から 4.8%へと 8 倍となっていた。2 回目から 3 回目については、要介護 2 と 3 においては自立割合は、減少していたが、要介護 4 と 5 は、増加しており、要介護 4 は 5.8%から 6.8%へ、要介護 5 は 4.8%から 6.3%へと増加していた。3 回目から 4 回目の要介護 4 が 6.8%と変化がなかった以外、すべての自立割合は減少していた。

表 94 要介護度別薬の内服「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	87	79.1	52.5	22.4	8.5	2.2	0.6	41.2
2回目	57	71.1	48.8	23.4	13.6	5.8	4.8	39.4
3回目	47.8	64.7	44.0	21.0	12.8	6.8	6.3	35.8
4回目	39.1	58.4	39.3	19.1	11.8	6.8	4.8	32.3

(31) 金銭の管理

全体として金銭の管理は、初回は「自立」が 5,939 名 (36.8%)、「一部介助」が 4,595 名 (28.4%)、「全介助」が 5,622 名 (34.8%)であった。2 回目は、「自立」が 5,333 名 (33.0%)、「一部介助」が 4,528 名 (28.0%)、「全介助」が 6,295 名 (39.0%)であった。3 回目は、「自立」が 5,061 名 (31.3%)、「一部介助」が 4,151 名 (25.7%)、「全介助」が 6,944 名 (43.0%)であった。4 回目は、「自立」が 4,699 名 (29.1%)、「一部介助」が 3,801 名 (23.5%)、「全介助」が 7,656 名 (47.4%)であった。

これらの結果から、金銭の管理に何らかの介助が必要な要介護高齢者の割合は、初回 63.2%、2 回目 67.0%、3 回目 68.7%、4 回目 71.9%と、認定回数が増加するにしたがって、介助が必要な割合も増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護 2 までは初回から 4 回目まですべての回において、自立割合が減少していた。要介護 3 から 5 までは、初回から 2 回目まではすべて増加していた。2 回目から 3 回目は、要介護 3 では、自立割合が増加するが、要介護 4 では変化がなく、要介護 5 では、減少していた。3 回目から 4 回目には、要介護 3 の自立割合は減少するが、要介護 4 では増加し、要介護 5 では変化がなかった。

表 95 図 要介護度別金銭の管理「自立」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	91	69.5	45.0	20.6	11.3	5.5	3.6	36.8
2回目	52	62.9	39.8	17.9	11.5	5.8	6.0	33.0
3回目	43.5	59.0	37.4	17.1	12.5	5.8	5.7	31.3
4回目	39.1	53.8	35.2	15.8	11.5	6.4	5.7	29.1

(32) 視力

全体として視力は、初回は「普通」が 12,239 名 (75.8%)、「1 m 離れて見える」が 2,893 名 (17.9%)、「目の前で見える」が 761 名 (4.7%)、「ほとんど見えない」が 226 名 (1.4%)、「判断不能」が 37 名 (0.2%) であった。2 回目は、「普通」が 12,066 名 (74.7%)、「1 m 離れて見える」が 3,066 名 (19.0%)、「目の前で見える」755 名 (4.7%)、「ほとんど見えない」が 242 名 (1.5%)、「判断不能」が 27 名 (0.2%) であった。3 回目は、「普通」が 11,909 名 (73.7%)、「1 m 離れて見える」が 3,206 名 (19.8%)、「目の前で見える」が 753 名 (4.7%)、「ほとんど見えない」が 253 名 (1.5%)、「判断不能」が 35 名 (0.2%) であった。4 回目は、「普通」が 11,626 名 (72.0%)、「1 m 離れて見える」が 3,327 名 (20.6%)、「目の前で見える」が 845 名 (5.2%)、「ほとんど見えない」が 261 名 (1.6%)、「判断不能」が 97 名 (0.6%) であった。

これらの結果、視力の「普通」である要介護高齢者の割合は、初回 75.8%、2 回目 74.7%、3 回目 73.7%、4 回目 72.0%と減少していた。

要介護度別には、非該当は認定回数が 3 回目までは「普通にみえる」割合が減少するが、4 回目では増加していた。要支援から要介護 3 までは、「普通にみえる」割合は、認定回数が増えるにしたがって、各回数ともに減少していた。要介護 4 においては、初回から 3 回目までは、増加していた。要介護 5 は、初回から 4 回目まですべて増加しており、2 回目の時点で要介護 4 よりも普通の割合は高く、3 回目の時点で、すでに要介護 3、4 よりも高かった。4 回目の時点では普通にみえる割合は 71.6%であり、要介護 2、3、4 よりも高く示されていた。

表 96 要介護度別視力「普通」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	87	81.8	78.6	72.3	70.7	67.1	63.0	75.8
2回目	70	80.0	77.1	71.3	69.8	68.4	69.6	74.7
3回目	65.2	77.8	76.1	70.3	69.7	68.8	70.1	73.7
4回目	69.6	76.0	74.2	69.0	68.0	65.5	71.6	72.0

(33) 聴力

聴力は、初回は「普通」が9,999名(61.9%)、「やっと聞き取れる」が3,804名(23.5%)、「大きな声聞き取れる」が2,169名(13.4%)、「ほとんど聴こえない」が168名(1.0%)、「判断不能」が16名(0.1%)であった。2回目は、「普通」が9,732名(60.2%)、「やっと聞き取れる」が3,948名(24.4%)、「大きな声聞き取れる」が2,302名(14.8%)、「ほとんど聴こえない」が160名(1.0%)、「判断不能」が14名(0.1%)であった。3回目は、「普通」が9,512名(58.9%)、「やっと聞き取れる」4,058名(25.4%)、「大きな声聞き取れる」が2,396名(14.2%)、「ほとんど聴こえない」が173名(1.1%)、「判断不能」が17名(0.1%)であった。4回目は、「普通」が9,275名(57.4%)、「やっと聞き取れる」4,094名(25.3%)、「大きな声聞き取れる」が2,568名(15.9%)、「ほとんど聴こえない」が169名(1.0%)、「判断不能」が50名(0.3%)であった。

全体として、聴力については、「普通」である要介護高齢者の割合は、初回は61.9%、2回目は、60.2%、3回目58.9%、4回目57.4%と減少していた。

要介護度別には、非該当においては、3回目まで「普通」に聞こえるという高齢者は減少するが、4回目に増加していた。要支援から要介護4までは、初回から4回目まで、減少していたが要介護5は、初回が59.4%、2回目が61.2%、3回目が61.5%と増加し、4回目が60.6%と減少していたが、要支援から要介護4の高齢者に比較して「普通」の割合は高かった。

表 97 要介護度別聴力「普通」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	87	64.5	62.4	60.5	60.2	59.5	59.4	61.9
2回目	70	61.7	60.2	60.2	59.0	57.9	61.2	60.2
3回目	65.2	59.7	59.2	58.3	58.5	56.4	61.5	58.9
4回目	69.6	58.5	57.3	57.1	57.3	54.6	60.6	57.4

(34) 意思の伝達

意思の伝達については、初回は「伝達できる」が13,502名(83.6%)、「ときどき伝達できる」が2,183名(13.5%)、「ほとんど伝達できない」が379名(2.3%)、「できない」が92名(0.6%)であった。2回目は、「伝達できる」が13,295名(82.3%)、「ときどき伝達

できる」が2,318名(14.3%)、「ほとんど伝達できない」が453名(2.8%)、「できない」が90名(0.6%)であった。3回目は、「伝達できる」が12,966名(80.3%)、「ときどき伝達できる」が2,500名(15.5%)、「ほとんど伝達できない」が578名(3.6%)、「できない」が112名(0.7%)であった。4回目は、「伝達できる」が12,377名(76.6%)、「ときどき伝達できる」が2,836名(17.6%)、「ほとんど伝達できない」が753名(4.7%)、「できない」が190名(1.2%)であった。

全体としては、意思の伝達が完全にできない要介護高齢者の割合は、初回から4回目にかけて増加する傾向が見られた。

要介護度別には、非該当から要介護2までは、初回よりも2回目のほうが伝達できる割合は減少していたが、要介護3から5までは増加していた。2回目から3回目については、要支援から要介護4までは、すべて減少していた。非該当と要介護5だけが、伝達できる割合は増加していた。3回目から4回目には、すべての要介護度で伝達できる割合は減少していた。要介護5は4回目において、要介護3、4よりも伝達できる割合は高くなっており、視力と同様の結果となっていた。

表 98 要介護度別意思の伝達「伝達できる」の割合(%)の経年的変化(N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	96.9	90.7	79.2	66.7	60.8	52.2	83.6
2回目	91	95.2	87.9	77.2	67.1	64.5	63.0	82.3
3回目	91.3	93.8	85.3	74.4	65.8	63.2	65.4	80.3
4回目	82.6	91.0	81.9	69.7	61.3	61.1	62.7	76.6

(35) 指示への反応

全体として指示への反応は、初回は「通じる」が13,407名(83.0%)、「ときどき通じる」が2,604名(16.1%)、「通じない」が145名(0.9%)であった。2回目は、「通じる」が13,169名(81.5%)、「ときどき通じる」が2,822名(17.5%)、「通じない」が165名(1.0%)であった。3回目は、「通じる」が12,794名(79.2%)、「ときどき通じる」が3,156名(19.5%)、「通じない」が206名(1.3%)であった。4回目は、「通じる」が12,252名(75.8%)、「ときどき通じる」が3,577名(22.1%)、「通じない」が327名(2.0%)であった。

これらの結果のように、指示への反応が通じない要介護高齢者の割合は、初回から4回目にかけて増加する傾向が見られた。

要介護度別には、非該当から要介護3までは、指示への反応は、認定回数が増えるにしたがって、通じる割合が減少していた。要介護4と5については、初回から3回目までは、増加していたが、4回目は減少していた。要介護5の4回目の自立割合は、要介護3、4よりも高くなっていった。

表 99 要介護度別指示への反応「通じる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	96	96.0	88.6	78.1	68.2	64.2	60.9	83.0
2回目	96	93.3	86.1	76.9	67.7	67.0	68.1	81.5
3回目	91.3	91.1	82.9	73.6	66.5	68.5	70.7	79.2
4回目	91.3	88.5	79.6	69.8	63.8	63.4	65.1	75.8

(36) 毎日の日課を理解

全体としての毎日の日課を理解は、初回は、「できる」が 12,422 名 (76.9%)、「できない」が 3,734 名 (23.1%) であった。2 回目は、「できる」が 11,793 名 (73.0%)、「できない」が 4,363 名 (27.0%) であった。3 回目は、「できる」が 11,137 名 (68.9%)、「できない」が 5,019 名 (31.1%) であった。4 回目は、「できる」が 10,354 名 (64.1%)、「できない」が 5,802 名 (35.9%) であった。

このように、毎日の日課を理解ができない要介護高齢者の割合は、初回から 4 回目にかけて、増加していく傾向が見られた。

要介護度別には、非該当から要介護 3 までは、毎日の日課を理解できる割合は、漸次、減少していたが、要介護 4 と 5 においては、初回から 2 回目にかけては、要介護 4 は、49.8% から 54.5% へ、要介護 5 は、41.5% から 56.1% へと増加して、3 回目、4 回目は減少するという傾向を示していた。

表 100 要介護度別毎日の日課を理解「できる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	96	95.4	84.9	69.3	57.7	49.8	41.5	76.9
2回目	87	89.8	78.5	65.5	56.0	54.5	56.1	73.0
3回目	82.6	86.2	74.1	60.4	53.2	51.4	54.9	68.9
4回目	65.2	80.9	69.9	55.4	47.7	45.9	51.0	64.1

(37) 生年月日をいう

全体としては、「生年月日をいう」が初回は、「できる」が 14,574 名 (90.2%)、「できない」が 1,582 名 (9.8%) であった。2 回目は、「できる」が 14,385 名 (89.0%)、「できない」が 1,771 名 (11.0%) であった。3 回目は、「できる」が 14,027 名 (86.8%)、「できない」が 2,129 名 (13.2%) であった。4 回目は、「できる」が 13,466 名 (83.3%)、「できない」が 2,690 名 (16.7%) であった。

これらの結果からは、生年月日をいうことが「できない」要介護高齢者の割合は、初回から 4 回目にかけて、漸次、増加する傾向が見られた。

要介護度別には、生年月日をいうことが「できる」高齢者の割合は、要介護 3 と 5 を除

くと、初回から4回目まで減少していた。要介護3と5においては、要介護3では、初回から2回目に79.0%から79.5%へと増加し、要介護5では、68.4%から77.6%へと大きく増加していた。いずれの要介護度においても3回目、4回目は減少していくが、要介護5の4回目においては、生年月日をいうことができる割合は、要介護3、4よりも高かった。

表 101 要介護度別「生年月日をいうことができる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	98.2	94.8	87.8	79.0	77.2	68.4	90.2
2回目	96	97.0	92.8	85.8	79.5	76.9	77.6	89.0
3回目	95.7	95.8	90.3	83.1	76.8	75.3	75.8	86.8
4回目	95.7	94.3	87.4	79.0	70.8	70.6	71.3	83.3

(38) 短期記憶

全体として短期記憶は、初回は「できる」が12,385名(76.7%)、できないが3,771名(23.3%)であった。2回目は「できる」が12,096名(74.9%)、「できない」が4,060名(25.1%)であった。3回目は「できる」が11,551名(71.5%)、「できない」が4,605名(28.5%)であった。4回目は「できる」が10,872名(67.3%)、「できない」が5,284名(32.7%)であった。

これらの結果から、短期記憶ができない要介護高齢者の割合は、初回23.3%、2回目25.1%、3回目28.5%、4回目32.7%と増加していた。

要介護度別には、非該当から要介護2までは、短期記憶ができる高齢者の割合は、初回から4回目までで、漸次、減少していた。しかし、要介護3から5までは、初回から2回目に短期記憶ができる割合が増加していた。2回目から3回目においては、要介護5のみが、さらに増加していた。3回目から4回目には、すべての要介護度において、短期記憶ができる割合は減少していた。

表 102 要介護度別短期記憶「できる」の割合 (%) の経年的変化 (N=16,156)

	非該当	要支援	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	全体
初回	100	93.8	83.1	69.6	60.2	52.8	49.3	76.7
2回目	87	89.7	79.7	68.1	61.1	57.9	57.9	74.9
3回目	73.9	86.3	75.7	64.2	58.4	56.7	60.9	71.5
4回目	69.6	82.1	71.9	59.8	54.0	52.3	52.8	67.3

(39) 自分の名前をいう

全体としては、自分の名前をいうことができる、初回は、「できる」が15,920名(98.5%)、「できない」が236名(1.5%)であった。2回目は、「できる」が15,915名(98.5%)、「でき